

氏名(本籍)	和田博史(東京)
学位の種類	博士(体育科学)
学位記番号	甲第63号
学位授与年月日	平成28年3月10日
学位授与の要件	日本体育大学学位規程第5条の学位は、大学院学則第29条の規定により、大学院研究科博士後期課程(博士課程)を修了した者に授与する。
学位論文題目	ダリル・シーデントップ(Daryl Siedentop)の体育論の成立と展開 —プレイ体育論とスポーツ教育モデルに焦点をあてて—
審査員	主査 教授 関根正美 副査 教授 久保健 副査 教授 近藤智靖

論文審査結果の要旨

本論文は上記題目の主論文ならびに関連論文2編をもって提出され、審査に付された。

本論文の概要は以下の通りである。

本論文の対象とされているダリル・シーデントップはアメリカの体育学者であり、アメリカのみならず、これまでの日本の体育理論形成と実践に大きな影響を与えてきた。とりわけ高橋健夫によって1981年に翻訳された『楽しい体育の創造 —プレイ教育としての体育—』(原題: Physical Education-Introductory Analysis)はいわゆる「プレイ体育論」として、また同じく高橋訳による2003年の『新しい体育授業の創造 —スポーツ教育の実践モデル—』(原題: Sport Education-Quality PE through Positive Sport Experience)は日本に紹介されて以来、今日に至るまで多大な影響を与えてきた。本論文は「体育授業の改善」という著者自身の問題意識のもとにシーデントップの体育論とりわけ1976年の「プレイ体育論」と2011年の「スポーツ教育モデル」に焦点を当てて成立と展開を明らかにした。方法としては、1) 体育教科の存在意義、2) 意味と生涯スポーツの教育、3) 授業改善の方法という三つの分析視点を立て、日本の体育に多大な影響を与えたシーデントップ体育論の特徴を明らかにした。本論は三章で構成されている。

第一章ではプレイ体育論が論じられ、第一節にてプレイ体育論の成立背景が明らかにされた。第二節にて概念および目的・目標構造、授業展開の成果が明らかにされた。第三節にてプレイ体育論は体育教科の存在意義を担うものであり、スポーツという学習内容の価値を確保し教師の批判的思考向上を重視している点を明らかにした。第二章ではスポーツ教育モデルが論じられ、第一節で成立背景が明らかにされた。第二節で鍵となる概念が明らかにされ、スポーツ教育モデルの目的、授業展開、カリキュラム哲学についての内容が明らかにされた。第三節ではスポーツ教育モデルは健康教育や冒険教育など多様な教育課程に開かれたものであること、学習環境の改善をもたらすこと、教師教育プログラムとして構成されていることが明らかにされた。第三章ではこれまでの考察をもとにシーデントップ体育論に対する議論がなされた。具体的には方法で示された三つの分析視点にそってプレイ教育とスポーツ教育モデ

ルの共通点ならびに相違点が明らかにされた。

結論は以下の通りである。シーデントップの体育論にはプレイによる意味中心の体育と運動による教育の理念の融合が確認でき、具体的な方法論の確立があった。プレイ体育論とスポーツ教育モデルの関係は、スポーツ教育モデルはプレイ体育論を否定したものではなかった。シーデントップの体育論は体育の存在意義の確立と授業改善を目指して思想形成がなされてきた。その一連の思想形成において、プレイ体育論は受け継がれてきた。

以上の論文に対して審査を行った結果、以下の通りとなった

これまで日本の学校体育理論と実践に対して大きな影響を与えてきたシーデントップの体育論について、先行する紹介者ならびに研究者たちによって個別の問題として特徴付けられてきた点を総合的に捉え直した点に学術的価値がある。特に、シーデントップの体育論は、プレイによる意味中心の体育と運動による教育理念の融合であることを明らかにした点と、彼の体育論にはプレイ体育論が通底していることを明らかにした点は著者独自の着眼点及び知見である。このことによって、体育の楽しさが健康をも含む体育の果たす社会的責任に通じる点が示され、体育の存在意義を主張する方法を開いたことは体育学の発展ならびに学校体育の授業改善に寄与するものと評価できる。研究方法については、文献の解釈は妥当かつ精密になされていることが確認され、論述の論理性についても妥当であると確認された。

最終試験においては論文の概要発表の後、テーマの決定から文献の収集と解釈、執筆の過程に至るまでの説明が著者からなされ、論文の内容ならびに方法に関して審査員からの質問に関連する知識を解答に加えながら的確に答えている。本論文に対して審査員から一部の語句に関して修正点の指摘があったが、論文の内容に関わる点ではなく形式上の指摘であり本論文の価値を損なうものではない。

以上のことから、審査員は本論文を博士論文として全員一致で「合格」と結論づけた。

最終試験結果の概要

本論文の対象とされているダリル・シーデントップはアメリカの体育学者であり、アメリカのみならず、これまでの日本の体育理論形成と実践に大きな影響を与えてきた。本論文は「体育授業の改善」という著者自身の問題意識のもとにシーデントップの体育論とりわけ1976年の「プレイ体育論」と2011年の「スポーツ教育モデル」に焦点を当てて成立と展開を明らかにした。本論文の学術的価値は、シーデントップの体育論について、これまで紹介者ならびに研究者たちによって個別の問題として特徴付けられてきた点を総合的に捉え直した点にある。特に、シーデントップの体育論は、プレイによる意味中心の体育と運動による教育理念の融合であることを明らかにした点と、彼の体育論にはプレイ体育論が通底していることを明らかにした点は著者独自の着眼点及び知見である。このことによって、体育の楽しさが健康をも含む体育の果たす社会的責任に通じる点が示され、体育の存在意義を主張する方法を開いたことは体育学の発展ならびに学校体育の授業改善に寄与するものと評価できる。

最終試験において、論文の内容ならびに方法に関して審査員からの質問に関連する知識を解答に加えながら的確に答えている。

以上のことから、審査員は本論文を博士論文として全員一致で「合格」と結論づけた。